

氏 名	森 本 喜代美
学位の種類	修 士 (看護学)
学位記番号	修 士 第 1 2 3 号
学位授与年月日	平成 2 1 年 3 月 2 5 日
学位論文題目	在宅ホスピスケアを行う訪問看護師のストレスと対 処に関する研究

論 文 内 容 要 旨

※整理番号	127	(ふりがな) 氏 名	もりもと きよみ 森本 喜代美
修士論文題目	在宅ホスピスケアを行う訪問看護師のストレスと対処に関する研究		
研究目的	本研究の目的は、在宅ホスピスケアを行う訪問看護師のストレスと対処への思いを明らかにすることである。		
研究方法	研究方法は質的記述的研究方法で、在宅ホスピスケアを実践する訪問看護師 10 名に半構成的面接を用いてデータを収集し、面接内容をコードに記述し、カテゴリ化して分析した。		
結果	在宅ホスピスケアを行う訪問看護師のストレスと対処への思いを『下位カテゴリ』、《中位カテゴリ》、【上位カテゴリ】に抽象化し、カテゴリ間の関連を明らかにした。分析の結果、63 の下位カテゴリ、25 の中位カテゴリ、7 の上位カテゴリを抽出した。抽出された上位カテゴリの【患者・家族の意思決定支援に関わるストレス】は《患者の在宅で過ごしたい思いを支援する困難》《患者・家族の不安や葛藤に対する支援の困難》等 5 つの中位カテゴリで構成され、【家族支援におけるストレス】は《臨死期の家族支援の困難》《支援時に受ける患者・家族からのプレッシャー》等 4 つの中位カテゴリで、【患者・家族・医療従事者間に生じるギャップに対するストレス】は《患者・家族と医療従事者の病識のギャップに対する困惑》《医療従事者間の不十分な連携に対する困惑》の 2 つ中位カテゴリ、【看護師の予測・判断におけるストレス】は《医療的判断後の不安と後悔》《死期の予測・判断に対する困難》《在宅ホスピスに関する知識不足》の中位カテゴリで構成されていた。【ストレスへの対処】は《ストレスサインを自覚》し、《プライベートで気分転換》という情動中心型と、《一人で抱え込まない》、《看護の経過を振り返り次への関わりに活かす》の問題中心型があった。さらに【在宅ホスピスケアにおける訪問看護師の理念】には《限られた時間の中での QOL の尊重》《患者・家族の意思決定の尊重》等 4 つの中位カテゴリがあった。また【看取りを通して得るケアへの原動力】として《看取りに対する満足感》《看取り後に知る患者の人生・家族の絆》の中位カテゴリがあった。		
考察	【在宅ホスピスケアにおける訪問看護師の理念】により訪問看護婦は業務を行うが、その中で現実との矛盾から【患者・家族の意思決定支援に関わるストレス】、【家族支援におけるストレス】、【患者・家族・医療従事者間に生じるギャップに対するストレス】、【看護師の予測・判断におけるストレス】を生じていると考えられる。それらのストレスに対しては、個々の訪問看護師が工夫して【ストレスへの対処】行動をとっていることとなると思われ、この対応がうまくできている場合には【看取りを通して得るケアへの原動力】に結びつくと考えられる。しかし、この対応がうまく機能しない場合には職場に適応できなくなり離職などへと関連していくと思われる。		
総括	本研究にて在宅ホスピスケアを行う訪問看護師のストレスと対処への思いが明らかとなった。このことから、訪問看護師のホスピスケアにおけるストレスを軽減し、そのケア能力を向上させるためには訪問看護師がホスピスケアの高い専門性を獲得できる研修制度の確立、職場環境の整備・充実、医療従事者間の連携体制を充実させること等が重要であると考えられる。		

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200 字程度)
2. ※印の欄には記入しないこと。